

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00680

研究課題名(和文)日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築

研究課題名(英文)The Database Construction of Correct Use and Misuse in Considerate Expressions for the Dictionary of Japanese Considerate Expressions

研究代表者

山岡 政紀(Yamaoka, Masaki)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：80220234

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 7,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究課題においては、当初の計画通り、以下の成果を挙げる事ができた。
日本語配慮表現正用・誤用データベースのフィールドを構造を決定した。配慮表現の慣習化に関する議論を深め、その結果として配慮表現の定義を明確にし、研究代表者・分担者・協力者の間で共有することができた。
日本語配慮表現正用・誤用データベースに約100語の配慮表現の情報(形式分類・機能分類・原義・配慮機能・文脈/発話機能・コーパス正用例・コーパス誤用例・英語対訳・中国語対訳)を入力した。配慮表現の研究成果を集めた論文集として『日本語配慮表現の原理と諸相』(山岡政紀編、くろしお出版、2019)を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ポライトネスが慣習化した表現群である配慮表現については個別の表現に対する研究成果は個々に見られたが、その実態の全体像は全く把握されていなかったため、本研究課題はその実態の記述に初めて着手した研究として大きな学術的意義を有すると考える。具体的には主要な配慮表現100種のコーパス用例や機能をデータベースに蓄積したことにより、これをもとに『配慮表現辞典』を編纂し、日本語研究者・日本語教師・日本語学習者らの便宜に供する素地ができた。また、研究成果のなかから多言語の配慮表現との対照に対する考察も蓄積されたことにより、世界の諸言語の配慮表現研究へと視野を拡げていく準備が整ったと考える。

研究成果の概要(英文): In this research project, the following results were achieved as originally planned.

We have determined the structure of the fields of the correct use/misuse database of Japanese considerate expressions. We deepened the discussion on the conventionalization of considerate expressions, and as a result, we have clarified the definition of considerate expressions and share them among the research project members. We had input the information on around 100 considerate expressions into the database of correct use/misuse of Japanese considerate expressions (formal classification, functional classification, original sense, considerate function, context/speech function, corpus proper use example, corpus misuse example, English parallel translation, Chinese parallel translation). As a collection of research papers on considerate expressions, we have published "Principles and Aspects of Japanese Considerate Expressions", (Edited by Masaki Yamaoka, Kurosio Publishers, 2019).

研究分野：日本語学、語用論

キーワード：配慮表現 ポライトネス 敬意表現 慣習化 語用論

1. 研究開始当初の背景

もともと日本語には対人的配慮に基づく表現が数多くあった。贈り物を贈る際に、それが高価な贈り物であっても「つまらないものですが」との言葉を添えたり、相手の実際の多忙さに関わりなく儀礼的に「ご多忙のところ」と前置きしたりなど、副詞句に多く見られるこれらの表現には、その句を構成する実質語の本義が捨象され、対人的儀礼として慣習化しているものが少なくなかった。それらは、固着的な連語表現という点で、隠喩が慣習化した慣用句(例・火中の栗を拾う、助け船を出す、等)と似た特徴を有するが、慣用句は範疇化されて辞典まで作られているのに対し、配慮表現は範疇化も表現群の収集も十分になされてこなかった。日本語話者にとっての自然さゆえに看過されてきたと考えられる。

そして、21世紀に入って以降、井出祥子による「敬意表現」の考察や、彭飛、山岡政紀(研究代表者)、野田尚史(連携研究者)らによる「配慮表現」の範疇化・考察が徐々に進められ、現在はこれらの配慮表現研究が日本語学・日本語教育・語用論の主要な研究テーマとなるであろうことを予見させる萌芽的状况にある。

研究代表者のこれまでの研究では、前述の副詞句のように形式的に慣習化した連語表現だけでなく、形式的には何ら慣習化していない単語レベルでも、その意味が当該語彙の原義を離れて配慮機能に慣習化している事例を多く指摘している。副詞4語の事例を簡略に示す。

配慮表現	原義	配慮機能	配慮表現の用例(原義喪失)
ちょっと	程度がわずかなさま	相手との摩擦を緩和	協力はちょっとできかねます
ぜんぜん	全面的な否定	相手の心的負担を緩和	私、ぜんぜん行けますよ
たしかに	まちがいないさま	相手への賛同を表す	たしかにあの人田中さんかも
いちおう	不十分であるさま	自賛の程度を抑制	いちおう東大を出ています

いずれもある一定の文脈(ここでは省略)のもとで、各語が原義を喪失して対人的な配慮機能のみに特化された表現となっている。しかもこれらは同様の文脈が頻出するため、文脈ごと慣習化して定着している。このような特徴を備えた配慮表現は副詞だけでなく、形容詞(すごい、大変だ等)、接尾語・補助動詞(とか、たり、~てくれる等)、文末表現(~かもしれない、~させていただく等)などにも数多く見られる。以上述べてきた配慮表現をめぐって、配慮表現に該当するのはどの語彙・表現なのか? 配慮表現の使用文脈と配慮機能との相関関係を体系的に記述することができるか? そのことを日本語教育の教材開発やコースデザインに活かすことはできるか? 等々の問題を解決できる研究が必要とされた。

2. 研究の目的

- (1) 理論的言語研究においては、現状において既に配慮表現が、現代日本語研究の特に語用論の分野で研究者の関心を強く惹きつけており、主要な研究テーマの一つとなりつつある。その状況下において、これまでは個々の配慮表現に対して、個別の説明がなされてきた。本研究課題により、配慮表現研究に明確な全体像と今後の研究のための体系的な指標を与えることができる。
- (2) 日本語教育においては配慮表現が学習項目として適切に導入されていない現状があるが、本研究課題の成果により、日本語教育関係者が中上級日本語教育の教材開発、教授法研究において適切に配慮表現を導入していくための判断材料が提供されることとなり、日本語教材への配慮表現の導入、日本語学習者の理解・習得が促進される。
- (3) 配慮表現が既に実態として現代日本語に満ちあふれていることを考慮したとき、初等・中等教育における国語教育の指導項目としても看過することはできない。敬語表現は既に初等教育(小学校)の段階から導入されているが、配慮表現はより高度な対人的配慮が必要であるため、中等教育(中学・高校)での導入が望ましい。本研究課題により、文部科学省や国語審議会の議論・検討に一石を投じるものとなる。
- (4) 本研究課題の成果は一般国民が日本語の配慮表現の有効性を自覚することにもつながり、より円滑な日常の対人関係構築に役立つことが周知される契機となる。また、本研究の成果をもとにした一般向け啓蒙書が編まれ、生涯教育にも供することが期待できる。

3. 研究の方法

- (1) 日本語における配慮表現に該当する語彙・表現を出来る限り多く認定する。
- (2) 各配慮表現の正用例を日本語コーパス(現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、日本語自然会話書き起こしコーパス、シナリオ会話コーパス等)から収集する。
- (3) 各配慮表現が使用される文脈を記述する。具体的には、発話の発話機能(例・《依頼》、《主張》、《反論》)や、発話を取り巻く語用論的な状況(発話者の対人関係、発話内容等がもたらす発話参与者への心理的負担など)を用例から丹念に記述する。
- (4) 各配慮表現の使用文脈と配慮機能(=対人関係にもたらす効果)との相関を、Leech と Brown

& Levinson のポライトネス理論をもとに分析し、考察する。

- (5) 各配慮表現の誤用・非用(使用すべき文脈で使用しない)と認定される用例を日本語学習者コーパス(KY コーパス、日本語学習者データベース、学習者作文コーパスなたね、寺村誤用例集データベース等)から収集し、該当箇所にラベリングを行う。
- (6) 学習者の誤用例・非用例をもとに日本語学習者における配慮表現習得の困難点を予測し、日本語教育へのより適切な導入法、コースデザインのあり方を整理する。
- (7) 各配慮表現に対し、英語、中国語、韓国語、タイ語、アラビア語との対訳を作成する。
- (8) 以上の研究成果を日本語配慮表現データベースに集積する。
- (9) 配慮表現の研究成果の詳細について論文集『日本語配慮表現の原理と諸相』を執筆・編纂し、刊行する。
- (10) 前項のデータベースの中から各配慮表現の意味・機能の説明と用例をコンパクトに整理・抽出し、日本語学習者の学習、日本語教育・国語教育に従事する教育者、指導者の研鑽に供する『日本語配慮表現辞典』の基盤となる簡略版データベースを作成する。

4. 研究成果

本研究課題においては、当初の計画通り、以下の成果を挙げる事ができた。

- (1) 日本語配慮表現正用・誤用データベースの構造を決定した。具体的には「配慮表現、読み、形式分類・機能分類・原義・配慮機能・文脈/発話機能・コーパス正用例・表現文型・コーパス誤用例・誤用文型・英語対訳・中国語対訳」以上の項目をフィールドとするデータベースである。
- (2) 配慮表現の慣習化に関する議論を深め、その結果として配慮表現の定義を明確にし、研究代表者・分担者・協力者間で共有することができた。配慮表現の定義としては、「对人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが一定程度以上に慣習化された言語表現」を採用した。特に慣習化現象について配慮表現を範疇化してリストアップするための根拠として重要であり、この件についてはかなり議論を深めてコンセンサスを形成した。
- (3) 日本語配慮表現正用・誤用データベースに約 100 語の配慮表現の情報を入力した。具体的には、既に入力が完了した配慮表現項目のうち、主要なものを以下に挙げる。
〔副詞・副詞句〕あいにく、いちおう、お言葉に甘えて、さすが、実は、自分で言うのも何ですが、全然、絶賛、ただ、たしかに、どちらかということ、なるほど、本当に
〔形容詞〕大丈夫、とんでもない、滅相もない
〔文末表現〕～かねない、～気がしないでもない、～させていただく、～たりする、～てほしい、～ね、～よね
- (4) 配慮表現の研究成果を集めた論文集として『日本語配慮表現の原理と諸相』(山岡政紀編、くろしお出版、2019)を刊行した。第1部「配慮表現の原理」(第1章～第3章、山岡政紀担当)では配慮表現研究の総論として第1章「配慮表現研究史」、第2章「配慮表現の定義と特徴」、第3章「配慮表現の分類と語彙」を収めた。第2部「日本語配慮表現の諸相」(第4章～第10章)では、配慮表現研究の各論として、単語レベルのもの(第4章)、機能的な文法形式(第5章-第7章)、単語と文法形式との呼応(第8章)、文法形式の選択(第9章)、配慮言語行動(第10章)について収めた。第3部「配慮表現の対照研究」(第11章～第14章)では、日本語の配慮表現と他言語(英語、中国語、アラビア語、ウズベク語)において対応する表現との対照を試みた。
- (5) 主要な配慮表現 100 種のコーパス用例や機能をデータベースに蓄積したことにより、これをもとに『日本語配慮表現辞典』を編纂し、日本語研究者・日本語教師・日本語学習者らの便宜に供する素地ができた。また、研究成果のなかから多言語の配慮表現との対照に対する考察も蓄積されたことにより、世界の諸言語の配慮表現研究へと視野を拡げていく準備が整ったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Yamaoka, Masaki	4. 巻 2
2. 論文標題 Construction of a database for the correct and incorrect use of considerate expressions, for the formation of a Japanese considerate expression dictionary	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Impact	6. 最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21820/23987073.2021.2.62	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 山岡政紀	4. 巻 10
2. 論文標題 日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(3) 2020年度の活動報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山岡政紀	4. 巻 59-2
2. 論文標題 言語学から人間学へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋学研究	6. 最初と最後の頁 273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 牧原功	4. 巻 10
2. 論文標題 日本語の挨拶表現とポライトネス 「こんにちは」について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野 正樹	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 二三日	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 112-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野正樹	4. 巻 12
2. 論文標題 語用論からみる言語と身体性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文明のクロスロード 多元性のパラダイムを求めて	6. 最初と最後の頁 522-531
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三宅和子, 岩崎典子	4. 巻 30
2. 論文標題 Fluidity and diversity of Japanese communities	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Asian Pacific Communication	6. 最初と最後の頁 34-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/japc.00067.miy	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 甲田直美	4. 巻 10
2. 論文標題 後回しの配慮 注釈の談話標識「ただ」「実は」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田光一	4. 巻 2
2. 論文標題 グライスの枠組みの動的な運用方法と失言が不適切な理由	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 動的語用論の構築へ向けて (開拓社)	6. 最初と最後の頁 200-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大和啓子	4. 巻 10
2. 論文標題 丁寧体で用いられる「てしまう」縮約形「ちゃう」の配慮機能	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斉藤信浩・玉岡賀津雄	4. 巻 19
2. 論文標題 理由を表さない日本語のカラ節の理解	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies in Language Sciences (言語科学会)	6. 最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李丹	4. 巻 1
2. 論文標題 応答発話における副詞「たしかに」の機能について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本語と中国語の副詞』日中対照言語学会編 (白帝社)	6. 最初と最後の頁 57 - 77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李丹	4. 巻 10
2. 論文標題 副詞「たしかに」の慣習化にみる未実現事態への危惧	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 64 - 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李奇楠	4. 巻 10
2. 論文標題 接辞の用法とポライトネス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岡政紀	4. 巻 8
2. 論文標題 日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(1) 研究計画と2018年度の活動報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山岡政紀	4. 巻 9
2. 論文標題 日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(2) 2019年度の活動報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 74-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山岡政紀	4. 巻 3
2. 論文標題 日本語疑問表現の会話における発話役割 発話機能論からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語語用論フォーラム	6. 最初と最後の頁 43-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李奇楠	4. 巻 9
2. 論文標題 賛否両論の発話について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 26-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 牧原功	4. 巻 8
2. 論文標題 日本語教科書に見られるポライトネスストラテジー : 初級教材と上級教材の比較を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 リナ・アリ	4. 巻 8
2. 論文標題 不利益行為における自他動詞の選択について : 配慮表現としての機能を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語コミュニケーション研究論集	6. 最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山岡政紀	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語の配慮表現	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山岡政紀・牧原功・小野正樹著『新版・日本語語用論入門』	6. 最初と最後の頁 147-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田光一	4. 巻 20
2. 論文標題 談話内のことわざの代用機能とグライスの協調の原理の再評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『語用論研究』	6. 最初と最後の頁 41-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 甲田直美	4. 巻 1
2. 論文標題 接続詞の語形変化と音変化 - 方言談話資料からみた接続詞のパリエーション -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小林隆(編)『コミュニケーションの方言学』	6. 最初と最後の頁 271-291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 配慮表現はいかに普遍的であるか
3. 学会等名 日本語用論学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野正樹、牧原功
2. 発表標題 日本語の配慮表現
3. 学会等名 日本語用論学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 甲田直美
2. 発表標題 英語の配慮表現
3. 学会等名 日本語用論学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李奇楠
2. 発表標題 中国語の配慮表現
3. 学会等名 日本語用論学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 リナ・アリ
2. 発表標題 アラビア語の配慮表現
3. 学会等名 日本語用論学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 甲田直美
2. 発表標題 談話標識の出現傾向からみた会話の特性—BTSJコーパスから—
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 発話機能が慣習化した第3モダリティ
3. 学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 甲田直美
2. 発表標題 「真実性」の談話標識と配慮
3. 学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大和啓子
2. 発表標題 てしまう縮約形ちやうの用法とその特徴
3. 学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 牧原功
2. 発表標題 日本語のポジティブポライトネスストラテジー
3. 学会等名 配慮表現データベース研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大和啓子
2. 発表標題 配慮データベース入力項目たり(する)・てしまうの検討
3. 学会等名 配慮表現データベース研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤秀明
2. 発表標題 日本語配慮表現と日本語教育をつなぐもの 社会言語能力を基盤としたMediation能力の育成
3. 学会等名 配慮表現データベース研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 斉藤幸一
2. 発表標題 配慮表現「～てほしい」について {策動}を中心に
3. 学会等名 配慮表現データベース研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李丹
2. 発表標題 副詞「たしかに」の慣習化にみる未実現事態への危惧
3. 学会等名 配慮表現データベース研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 配慮表現「自分で言うのも何ですが」に関する考察
3. 学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 牧原功
2. 発表標題 配慮表現データベースの項目について - 配慮表現に特化した授受表現、インポリイトネスとしての比較表現 -
3. 学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野正樹
2. 発表標題 文末名詞化表現についての一考察ーポライトネス理論の観点からー
3. 学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大和啓子
2. 発表標題 談話における「てしまう」縮約形「ちゃう」の使用について
3. 学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 李丹
2. 発表標題 配慮表現としての「たしかに」の中国語への対訳について
3. 学会等名 第12回日本語コミュニケーション研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 配慮表現データベースの入力について
3. 学会等名 日本語コミュニケーション研究会合宿
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 日本語教育における配慮表現の導入と中級表現文型
3. 学会等名 第2回中日言語と翻訳シンポジウム（中国・華僑大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 ポライトネスと配慮表現
3. 学会等名 フランス国立東洋言語文化大学「言語の主観性」研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山岡政紀
2. 発表標題 日本語固有の配慮表現と中級表現文型
3. 学会等名 北京大学創立120周年記念国際学術シンポジウム「日本と世界：文明の伝播、交流と発展」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤田浩子・小野 正樹
2. 発表標題 助言」に関わる発話機能とモダリティ形式の偏り 日中両言語における対話のプロフィシェンシー
3. 学会等名 第11回東アジア若手研究者合同研究フォーラム「東アジアの知疎通と還流」高麗大学（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野正樹
2. 発表標題 誤用から寛容への日本語教育
3. 学会等名 国際学術学会「教育現場における日本語」復旦大学（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NISHIDA Koichi
2. 発表標題 Proverbs as proforms of evaluative utterances
3. 学会等名 4th International Conference of the American Pragmatics Association, University at Albany (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KODA Nomi
2. 発表標題 Position-sensitive analysis of Japanese connectives in talk-in-interaction
3. 学会等名 5th International Conference on Conversation (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山岡政紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 254
3. 書名 日本語配慮表現の原理と諸相	

1. 著者名 山岡 政紀、牧原 功、小野 正樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明治書院	5. 総ページ数 196
3. 書名 新版 日本語語用論入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本語コミュニケーション研究会
<http://home.soka.ac.jp/~myamaoka/J-communication.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野 正樹 (Ono Masaki) (10302340)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	
研究分担者	牧原 功 (Makihara Tsutomu) (20332562)	群馬大学・国際センター・准教授 (12301)	
研究分担者	甲田 直美 (Koda Naomi) (40303763)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	西田 光一 (Nishida Koichi) (80326454)	山口県立大学・国際文化学部・教授 (25502)	
研究分担者	三宅 和子 (Miyake Kazuko) (60259083)	東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員 (32663)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	斉藤 信浩 (Saito Nobuhiro) (20600125)	九州大学・留学生センター・准教授 (17102)	
研究分担者	大和 啓子 (Yamato Akiko) (60640729)	群馬大学・国際センター・講師 (12301)	
研究分担者	伊藤 秀明 (Ito Hideaki) (70802627)	筑波大学・人文社会系・助教 (12102)	
研究分担者	斉藤 幸一 (Saito Koichi) (50649845)	大阪電気通信大学・教育開発推進センター・特任講師 (34412)	
研究分担者	宮原 千咲 (Miyahara Chisaki) (00779267)	広島修道大学・学習支援センター・学習アドバイザー (35404)	
研究分担者	遠藤 李華 (Endo Rika) (40854089)	創価大学・公私立大学の部局等・助教 (32690)	
研究分担者	李 丹 (Li Dan) (60876704)	創価大学・文学部・助教 (32690)	
研究分担者	市川 真未 (Ichikawa Mami) (30779137)	創価大学・公私立大学の部局等・助教 (32690)	誤用例収集・日本語教育への応用・データベース入力

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大塚 望 (Otsuka Nozomi) (80334639)	創価大学・文学部・教授 (32690)	正用例収集・理論的分析・データベース入力

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	野田 尚史 (Noda Hisashi)		
研究協力者	徳井 厚子 (Tokui Atsuko)		
研究協力者	塩田 雄大 (Shioda Takehiro)		
研究協力者	李 奇楠 (Li Qinan)		
研究協力者	金 玉任 (Kim Ockim)		
研究協力者	ラオハブラナキット カノックワン (Laohaburanakit Kanokwan)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アリ リナ (Ali Lina)		
研究協力者	池上 達昭 (Ikegami Tatsuaki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関